



vol.4
「盛岡でおあげんせ。」(2006年11月)
豆腐、はちみつ、べんじえもの、うすやきと盛岡らしい食をクローズアップ。その中でモノクロの1枚写真と会話文で構成したこのページは、異色の企画に。写真はカメラマン松本伸さんの作。



vol.3
「岩大的、青春。」(2006年5月発行)
岩手大学特集では宮沢賢治も暮らしていた寮に潜入し、伝統行事「ストーム」を特別に見学。「会いたい人に会える」「見たいものを見られる」が「てくり」取材の醍醐味。



vol.6
「Old-Fashioned love ~用の美、古いもの、今に生きる。~」(2007年11月)
「てくり」の展開期にもなった号。モノへの向き合い方を改めて考えた先に、別冊「te no te」の発刊、そして、この号で出会った人たちと、ブックイベント「モリプロ」も企画できたのだった。



vol.5
「公園まで、お散歩に。」(2007年6月)
特集で取り上げた詩人・立原道造が『盛岡ノート』に綴った青い花=ワスレナグサの写真を載せたいがために、開花を待って発行を遅らせたという思い出深い号。



vol.8
「そめ×ものづくり。」(2008年11月)
着物に目覚めた「てくり」スタッフの永遠の憧れ・紫根染。そのすべてが見たくて、南部ムラサキの畑、染色・型付けの現場、絞り手のお宅などにもお邪魔した。別取材で東京出張にも行ったんです。



vol.7
「アートの気配にさそわれて。」(2008年6月)
とにかく「個性」がこれ程いっぺんに登場する号はないかも。そして、街なかの飲食店にも当たり前のようにアートが点在する、盛岡の奥深さを知った。



書店用POP。本誌には使われなかった写真もある

記事あれこれ

創刊号は「うちはこんな本ですよ」というあえてバラエティに富んだ内容に。それ以後は、一本の特集を核とした構成へと変化していきました。



vol.2
「メイド・イン・モリオカ。」(2005年11月)
東京から弟子入りした職人がいるとの噂を聞きホームスパンの中村工房を訪ねた。噂は間違いだったが、中村さんと商品が魅力的だったので急遽企画変更、特集に。



創刊号
「橋をわたって、川をこえて。」(2005年5月)
小ネタページは幻のサニーランド蛇ノ島……。『探偵!ナイトスクープ』的発想で企画したページ。意外にも読者受けが良く、以降、思い出したようにこの手の企画が、ちょこちょこ登場しています。





vol.16
「パンとごはん。」(2013年1月)

収穫の秋にちなんだ特集は、読者の胃袋をつかんで (!) 反響大。撮影時にいただいた、人生初の焼きたてのフランスパンは、味以上に食感が印象的だった。早朝5時からの撮影は、4号の豆腐以来。



vol.15
「写真と街と。」(2012年5月)

気になっていた「唐たけし写場」改装の噂を聞き、駆け込みセーフで取材。震災以降の虚脱感を少し払拭できた。地味ですが、いい特集だと思ってます!



vol.10
「北の宿から。」(2009年12月)

連載コーナー「あなたはなぜ、ここにいるのですか?」は、「短髪男子礼賛スペシャル」。実は「坊主特集」としたかったのだが(すみません……)。トビラの絵の暗示がわかるかな……。



vol.9
「ハンバーグ、食べた?」(2009年5月)

洋食特集のおいそうなページの合間に、染め絵作家・福田隆さん作の老舗商店のスタンプ紹介。これをヒントに「モリプロ」のスタンプラリーが始まったのだ!



vol.18
「盛岡つづみ物語」(2014年1月)

釜定の宮さんのお話を伺うなら、奥山さんの方が良いよね、ということのでかなりのボリュームを書いてももらった。写真も文章も、さすがの出来映えで一同まんぞく(ライター2人はちょっと楽できた号)。



vol.17
「山は、待ってくれる。」(2013年8月)

身体を張った「山」特集。ふだんの行いが良いせいか (!?), 岩手山ではご来光も拝めた。以来登山の虜になり、趣味として楽しむようになったスタッフも。



vol.12
「お酒とわたし。」(2010年11月)

気分は「夏子の酒」。でも、酒蔵から始まらないちょっとアマノジャクな酒企画。この時期、てくりプロデュース shop+space「ひめくり」もオープンした。赤坂の連載、「デリシャス」も絶好調!



vol.11
「光原社 All about」(2010年6月)

5年目で挑んだ光原社特集は、もっとも早く完売! ムチャ振りのつもりが快諾スタートの新企画「もりおかわんこ」は、奥山淳志氏の犬語が大好評。



vol.20
「続けるひと。」(2015年5月)



vol.19
「Sweet Memories ~甘い記憶」(2014年9月)

「おやつ」がテーマの第一特集と、街のシンボル「盛岡バスセンター」を取り上げた第二特集の二本立て。建て替え計画が進む同センターの取材は念願だった。



vol.14
「盛岡カルチャーラン」(2012年2月)

街あるきのガイドが欲しいという声を小耳にはさみ、これまでの取材先を線をつないだ14号は珍しい組み方。お土産にぴったり! と一番の売れっ子さん。このたび再増刷できました!



vol.13
「伝える仕事。」(2011年5月)

震災で紙も手に入らず、印刷会社もストップ。季節は夏に押したが、当初予定していた「本特集」を切り替え、「伝えるしごと」がテーマ。やや悶々とした号。

